

児童健全育成賞（数納賞）佳作

遊びでつながる子ども達

—不登校になった子どもとその母親への支援—

沖縄県うるま市

みどり町児童センター 館長 山城 康代

うるま市の児童館

うるま市は平成19年に2市2町が合併してできました。5つの離島があり、かつ商業地域もあり、沖縄県では3番目に人口が多い市です。児童館は6館あり、すべての児童館に放課後児童クラブが併設されており、指定管理者で運営されています。指定管理者が違っても、児童館のつながりを大切にしたいという思いから、館長会、児童厚生員、放課後児童支援員、加配児担当者と担当者毎の勉強会を毎月1回開催しています。加配担当勉強会では事例を持ち寄り、子どもの様子やよかったこと、課題などを話し合ったり、研修で学んだことを振り返ったりする場となっています。毎年4月には6館合同の「遊びにコンビニ」を開催し、夏休みには6館ドッジボール交流会を開催するなど、職員間がつながり、お互いに相談しあえる仲になっています。

児童館から見えた、子どもの大変さや保護者の悩みを共有する中で、障がいの子を持つ親の会が4児童館での広がりにつながりました。また、子ども食堂や中学生の居場所作り（無料塾）なども6館で話し合い、行政へ提案をすることができた結果、29年度から6館で子ども食堂と中学生の居場所づくりを始めました。この事業により、中学生の来館が増える事につながり、また気になる子ども達への支援も進んでいます。

児童館でできる支援を共に考える事ができる仲間がいる事は、児童館運営をする上で、とても支えになっています。

障がいの子を持つ親の会

この事例はA君の母親から承諾を得ることができた事で、公表をしています。

初めに、うるま市6館で取り組んでいる事業「障がいの子を持つ親の会（以下、親の会）」の紹介をします。Aくんの事例では保護者の支援に親の会が果たした役割がとても大きいからです。

親の会を作るきっかけはあるお母さん達の苦悩でした。「お母さんの育児が悪かったんですね」。この言葉は、子どもが発達障がいである事を保育士に伝えると返ってきた言葉だったといえます。そのお母さんは「1週間泣きました」とその時のつらさを話してくれました。

10年前には今のように発達障がいへの理解が広がっておらず、周囲から親の育児が悪いなどと言われ、子育て広場へ行く事もできずに悩んでいたのです。学校へ理解を求めても支援は進まず、「自分の育児が悪いのか」「こんな障がいに生んだ自分が悪い」、お母さん達はそんな悩みを抱えていました。落ち着かず動き回ったり、コミュニケーションがうまく図れなかったり、集団へ入れないわが子との関わり方にも戸惑う姿がありました。

見えない障がいを抱えて生きていく子どもの大変さと母親の苦悩を聴きながら、私たちは、児童館で何かできる事はないか、もっと地域に発達障がいへの理解が広がる方法はないだろうかと考えていました。そんな中、「親の会」で悩みを共有し情報交換することで、お互いをエンパワメントすることが出来るのではないか。障がいを理解してもらうには、当事者である親の思いを伝える事で理解が広がるのではないかと考えました。しかし、当事者ではない私が親の会を作り、呼びかけたところで、親の悩みに共有できるのか？欲しい情報を伝えられるのか？と考えると、「中心になるのはやはり、当事者の親でなければ、お互いのエンパワメントはむづかしい」と思いました。そして、どうやって中心になってくれる親を探せばいいのかを半年近く思案していました。

親の会と行政の関り

そんな中、ダウン症の息子と発達障がいの息子のいるKさんが引越してきて、児童館に顔を出してくれるようになりました。Kさんは「子どもの障がいを理解してほしい」と地域の人々のところに出向き、「うちの息子をよろしくお願いします、何かあればご連絡をください」と息子をつれて歩いていました。その姿に私は、「Kさんなら親同士の悩みを話し合ったり情報交換ができる親の会を中心的にやってくれるのでは」との思いを抱き、「親の会を作ろうよ」と呼びかけると、すぐに賛同してくれました。Kさんも、「親の会を作りたい」との思いがあり、会の名前も「さくらんぼ」と考えていました。

それから6年、親の会は市内の6児童館のうち、4児童館で毎月1回開催され、親同士のエンパワメントの場となり、研修会や勉強会、交流会などと活動範囲が広がってきています。

行政は親の会の活動を知り、「親の会のためにできる事はありますか？」と声をかけてくれました。親の会の参加者から意見をつのり、ペアレントトレーニングや勉強会の講師、会を

運営するにあたっての消耗品などの予算を組んでもらう事ができ、活動は益々広がってきています。

「私達の地域にも悩む親がいる」との思いから、4児童館の親の会ではその地域の当事者の親がリーダーを務め、毎月1回のお茶会を行っています。

Aくんとのお会い

「館長、気になる子がいるんです。毎日公園に来るのですが、児童館で遊んだら、と誘っても中に入ってこようとはしないのです」。Aくんとのお成いは、2学期が始まりしばらくたってからでした。Aくんは、学校がまだ終わらない時間帯に一人で公園をぶらついていました。私たちは、学校には登校していないのだろうかと思になり、見かけるたびに何度か声を掛けてみると、いつのまにかAくんは体育館でゲンペイ（ドッジボールの個人戦のようなゲーム〈以下、ゲンペイ〉）をやり始めていました。「お友達と遊べる子なのに学校に行けていないのかな？」と思に思っていました、ゲンペイが終わると誰とも関わることなく、公園へ出ていき、ぶらついていて、ゲンペイが始まるとまた中に入ってくるという繰り返しでした。お友達と遊んでいる様に見えて、実は関わることはできていなかったのです。

Aくんに「どうして学校にいけないんだろうね」と聞くと「そんなことオレが知りたい」といいます。その言葉からは、行きたいけれど行けないもどかしさを抱えているような気がしました。「Aくんの不登校の理由を私も知りたい」とそんな思いから支援は始まりました。

Aくんの謎

Aくんが児童館に出入りするようになると、お母さんがお迎えに来るようになり、そこでお母さんから話を聞くことができました。Aくんは小学3年生で、2年生の時から学校には行けなくなり、今は、担任の先生と2人きりになれる時間に時々理科室に行っているとのことでした。

た。学校の先生からの勧めで検査をしたところ自閉症スペクトラムと診断されたそうです。お母さんは学校や教育研究所にも週1回通い、がんばってきましたが、Aくんはなかなか学校にいかず「もうどうしていいかわかりません」と悩んでいる様子でした。

保育園の時から一人遊びが好きで、図鑑とゲームが好き。遠足が嫌いで、その日が近づくとう鬱になるような子だったといいます。2年生の夏休み前に給食の後に吐いてしまい、からかわれた事と、また吐くのではないかとという怖さがきっかけになったのか、夏休みが明けから学校に行けなくなったといいます。お母さんと何度か面談をする中で、1年生の時も椅子に座らないため、お母さんが同伴してクラスに通っていたことなどがわかってきました。

「Aくんは児童館に来ることは出来るので、一緒に考えていきましょう。登校を焦らずに、気になる事や、困ったことがある時はいつでも相談をしてください」と伝え、お母さんのサポートも始めました。

お母さんのサポート

児童館で開催している親の会への参加を促すと、お母さんはすぐに参加を決めてくれました。偶然にも、親の会のリーダーであるKさんとA君のお母さんは専門学校が一緒だったという事で、すぐに打ち解ける事ができ、児童館で開催しているペアレントトレーニングにも興味をもちました。「本屋でみていたんですが、私も人と関わるのが苦手なので、どうしようか迷っていましたが、子どものためにもやらないといけないと思っています」と参加をしてくれました。

お母さんはこちらから尋ねると答えてくれますが、自分から相談をする事はあまりありませんでした。それが、親の会に参加するようになってからは「今まで、悩みを人に話すことはだめだと思っていましたが、親の会に参加して、話してもいいんだという事がわかりました、自分と同じ悩みを抱えていたり、つながりを感じま

した」と、話す表情は明るくなり、お母さんからAくんの相談に来ることも多くなってきていました。

児童館でのAくん

Aくんは、児童館でお友達と関わる事もなくゲンペイをしては出ていく事を繰り返しながらも、「投げるとすっきりする」といい、毎日のように児童館へ来るようになりました。Aくんは、教育研究所は話をすると、児童館は遊ぶところ、学校は何をしていいかわからないところと区分して、深い話をしようとするとはしませんでした。友達とおやつやお弁当などを一緒に食べる事ができず、児童館の事業にもなかなか参加しようとはしませんでした。

お母さんの話から、遠足やクリスマス会なども「待ってるから来てね」というと、気負いすぎて来ることが出来なくなることを知る事ができたので、職員でその対応を共有しながら、さりげなく事業へ誘う事にしました。クリスマス会が近づく「明日、クリスマス会があるからね」とそれとなく声をかけるようにしました。お母さんもなるべく集団へ入れるように、家族で参加してくれたりしました。また、A君はとても負けず嫌いで、私と一緒に動物将棋をして負けると怒り出し「勝ててうれしいだろ」と皮肉な言い方をしたり、おもちゃなどべたべたしたものが苦手である事もわかりました。児童館での様子などはお母さんに伝え、お互いにAくんの様子や情報を共有しながら、支援をしていきました。A君はクリスマスプレゼントを職員全員に作ってきてくれ「ここはいいね」とぼつりと言ってくれ、居場所として合格点をもらえ、信頼関係ができたかなと嬉しい気持ちになりました。

仲間との遊びが少しずつ広がりはじめました。Aくんが紙飛行機をつくって飛ばし始めたので、職員も一緒に作り飛ばしていると、子ども達が寄ってきて、「作り方を教えて」と言ってきました。A君は得意になって教え、一緒に紙飛行

機を飛ばしていました。また、外で草野球をしていると「入れて」といい、一緒に楽しんでいる様子ではないものの、なんとなくその場において、ふいっと抜けていったりしていました。ゲンペイだけでなく、少しずつ他の遊びへと関わりが広がってきていました。そのころ、お母さんも親の会のKさんとフラダンスを習い始めました。子どもにつきっきりだったお母さんは「自分にもこんな時間が必要かなと思って・・・」と気持ちのゆとりがでてきたように思えました。

友達との関わりの変化

年が明けて2月に生涯学習フェスティバルがあり、近くのドームで開催されるゲーム大会へ児童館の子ども達を連れて参加をすることになりました。いままで誘っても、土曜日などの集団イベント（特に館外活動）に、一人では参加しなかったAくんでしたが、前日に「明日のフェスティバルに一緒に行かない？」と誘うと、「行く」との返事でした。当日は来るかどうかはやはり心配でしたが、時間通り来て、一緒に会場へ行きました。参加者が500名近くの子どもの中で、同じ児童センターの子ども達とゲームを楽しんでいました。

母親のお迎えが遅くなるとの連絡が入り、予定が変更になったので、「帰りたい」というのではないかと思いましたが、相変わらず楽しそうにゲームを続け、不安そうな様子もなく友達と一緒に児童センターに帰ってきてお母さんを待っていました。不安はやはりあったとは思いますが、Aくんは友達と一緒にすごしながらその不安を乗り越えることができ、成長してきている姿が見られました。

学校との連携

Aくんは学校へは登校していませんでしたが、Aくんの児童館での様子を学校へも伝える必要性を感じ、私がAくんの様子を記録した支援シートをお母さんにみてもらい、学校へも伝える事を了承してもらいました。

学校へ行くと、担任の先生は「Aくんがお友

達と遊んでいるのですか？」とびっくりした様子でしたが、さっそく授業にドッジボールを取り入れ、Aくんを学校に誘ってくれました。しかし、3月が近づくと4月から学級担任や教室が変わる事への不安が高まってきました。環境の変化が苦手なAくんは、4月の事を考えると眠れなくなったりするらしく、児童館でもなんとなく元気がない様子でした。

教育研究所との連携も考え、Aくんの様子を伝えるために出向きましたが、教育研究所では「Aくんが児童館へ行って、大丈夫なのか気になります」と言われました。専門性がない地域機関に行くと、2次障がいを起こしてしまわないかとの懸念だったと思います。児童館という場所がまだまだ理解されていないというもどかしさを感じましたが、研究所は学校と児童館と母親と4者でケース会議をすることを提案してくれました。

しかしそれは実現できないまま、4月の始業式を迎えました。Aくんは始業式にはどうにか参加したものの、インフルエンザで学校を休んだ後登校ができなくなりました。また新しくなった担任の先生から「みんな、遊んでいるよ」とか「勉強ここまですすんでいるよ」との言葉がプレッシャーになった事も大きかったようで、新しい担任の先生にそれまでのAくんの事を伝えるタイミングを逃してしまったことや、Aくんもお母さんも不安になっているのがわかりながら、話し合いの時期を逃した事を残念に思いました。

Aくんはその後も児童館には変わらずに来館し、ゲンペイを楽しんでいました。そして、A君は児童館の友達と少しずつ話をするようになり、関わる事も多くなってきていました。児童館へ来る子ども達もAくんが学校へ行っていない事は知っていましたが、時々「なんで学校にこないの？」と聞いてくる子どもはいるものの、からかったり馬鹿にしたりする事はなく、子ども達は遊びや放課後の生活を通して、Aくんの事を理解してくれているのではないかと感じました。

再び学校へ

4月になり、特別支援学級へ通う予定になっていたAくんでしたが、学校に入ると下をうつむき、児童館で会う友達が呼びかけても返事も出来ないほど、頑なになってしまおうとお母さんから聞きました。学校へは登校できないまま、2ヶ月が過ぎていました。お母さんと相談し、校長先生にお会いして担任の先生との面談をお願いしました。再度Aくんの様子を伝え、児童館へAくんの様子を見に来てくれるようお願いをしたところ、先生は7月に2～3回ほど来館し、Aくんの様子を見に来てくれるようになりました。

その後、再度学校でAくんの事を話し合う機会を得る事ができ、お母さんも含め担任、通級学級の担任と校長先生、コーディネーターと一緒に話しあいました。先生は「学校に来ないと社会性が育たなのではないかと気になります」と話されましたが、「児童館で友達と遊ぶ事ができるので大丈夫です。」と伝えるとともに、学習の遅れが気になる事を相談すると、学校からプリントを準備してくれる事になりました。また、通級学級に在籍しているため、担任の先生は家庭訪問に行ったときにAくんがいないくて、その後、一度も顔を合わしていないことがわかりました。私からは児童館での様子と、Aくんが学校へ何かの不安を抱えている事があり、学校に入れなくなっているのではないかとその見解も伝えて、これから連携をしながら、Aくんを支援することを話し合う事ができました。

友達ができた

夏休み前になると、Aくんに親しい友達Cくんができました。日曜日になると家にも遊びにきたりしてくれていたそうです。そしてCくんの友達もAくんと一緒に遊ぶようになってきました。それがきっかけになったのか、それまではお昼を家に帰って食べていたAくんが、夏休みになると児童館にお弁当を持ってきて、友達食べているのを眺めながら、少し離れた場所

でお弁当を食べるようになってきました。

この頃、べたべたするものが苦手だったAくんが、公園で泥団子を作り始めました。私も一緒に作り始めると、他の子が寄ってきて一緒に作り始めて泥団子がブームになりました。初めは泥の感触が「気持ち悪い」と言っていた子ども達もAくんと毎日のように泥団子作りを楽しみました。泥団子作りで感覚の過敏さも少し和らいだせいか、友達との関わりがとてよくなり、あんなに遠足がいやだったAくんが、児童館の遠足で川に遊びに行く事になりました。お母さんも喜びましたが、当日になると「行かない」というかもしれません。心配しながら遠足の日を迎えました。A君は、児童館の前まではお母さんと来たものの、車から降りようとはしません。「やはり無理かな？」と思っていたら、全員がバスに乗りこんだ様子を見て、バスに乗りこんできました。お母さんもとても嬉しそうな表情で送り出してくれました。まだまだ感覚の過敏さもあるAくんは水が苦手なようで「こんなことして何が楽しいの？」といいながら、水をよけて歩いていましたが、Cくんから「A、魚とりしようぜ～」と誘われると、一緒に水の中に入って遊ぶ姿がみられました。それでもやはり水は苦手なようで、誰よりも早く川から上がり、休む姿が見られました。その日は児童館で仲良くなった4人の友達と一緒にお弁当を食べ、元気よく広場で遊んでいました。私は、そのA君の姿が嬉しくて、お母さんにその様子を伝え、A君が友達と関わる事ができるようになった事を一緒に喜びました。

学校に宝さがしに行くぞ！

夏休みも終わりに近づいた時、友達との関係がとてよくなったAくんを見て、今なら子ども達の力をかりて、Aくんを学校へとつなげる事ができるのではないかと思い、校長先生に「Aくんが学校への不安を払拭できるよう、Aくんの教室で宝さがしをしたいので教室を貸してください」とお願いをしに行きました。事前にAくんの事で話し合いをしていたため、教室

の使用を快く許可してくれました。その時、「Aくんは来るんですよね？」と問われ、思わず「はい、来ます」と返事をしましたが、確実にAくんが来てくれるという保証はありません。それでも、夏休みの誰もいない教室に、子ども達はきっと興味を示すに違いない、おまけつきならなおさらです。楽しい遊びならきっとみんなでAくんを誘い連れて来てくれるだろう。そんな思いで仕掛け作りを始め、当日を迎えました。ゲームは教室にキャラクター（妖怪ウォッチとアナと雪の女王）の絵をかくし、5枚以上集めるとキャラクターシールとお菓子がもらえるというルールです。私と職員二人で先に学校に到着し、仕掛けを作りながら子ども達が来るのを待ちました。Aくんが参加してくれるかどうかは、子ども達に頼るしかありません。

児童館では、職員が「今からみんなで学校に行って宝さがしゲームをしに行きます」というと、当初Aくんは知らんぷりをしていたのですが、友達が「A、いこうぜ！！」と誘ってくれて、Aくんも一緒に学校に来てくれました。

Aくんは学校の校舎の前になると表情が硬くなっていましたが、「いこう、いこう」と友達に背中を押され、しぶしぶ教室に入ってきました。最初は職員がカードを隠し、男の子、女の子に分かれて宝さがしを行いました。2度目は子ども達にカードを隠すようにと伝え、女の子用のカードを男の子が隠す番になると、友達と相談しながら生き生きと動き回っているAくんがいました。いままでの硬さがうそのように、「どこに隠す？」「トイレがいいかな？」など、相談しながらカードを隠しているAくん。

「子ども達に助けられた！」。遊びでつながった子ども達の仲間関係がAくんの背中を押し、学校への不安を払拭してくれたと思いました。校長先生も様子を見に来てAくんが来ている事を確認し、担任の先生にも伝えたようです。

新学期に登校へ

2学期が始まり、Aくんが登校しました。いままでは学校に入ると下をうつむき頑なになっ

ていたのに、お母さんが校長先生と話をしている間に、自分から学校にはいり、教室に座っていたそうです。お母さんも喜び、児童館に帰ってきたAくんもうれしそうで、「毎日でも学校に行ける、給食も食べられる」と言っていました。

その後、学校とも相談し、少しずつ慣れていこうと話し合い、午前中にいたり、午後の時間にいたりし始めました。しかし、おたふく風邪をひいて学校を休んでしまうと、また登校できない日々が始まりました。お母さんは「せっかく登校できていたのに、どうにかできないか」と焦りが見えましたが、私たちから「児童館へは毎日来ることができ、友達もいる」と、生きていく為の力は育っている事を伝え、お母さんにも焦らずに、一緒に様子を見ていきましょうと提案しました。

児童館に毎日来るBくんはやんちゃで、普段は乱暴な物言いをすることもありますが「A、学校に来いよ、できる時でいいからさ」と声を掛けてくれました。一瞬驚きましたが、「Bくんがこんな優しさを持っていたとは・・・」と思わず涙がこぼれそうになりました。Bくんは、学校に行く時にAくんを誘ってくれたり、児童館で話しかけたり、一緒にゲンペイをしたりとAくんに関わってくれました。「遊び」は子ども達をつなぎ、お互いを支え成長しあう大事なツールであると実感しました。

学校へ登校する。

児童館で社会性を育み、仲間関係がとても密になったAくんは、登校したりしなかったりを繰り返しながらも、5年生になると、順調に学校へ登校するようになりました。そして、同じ支援学級の子ども達を児童館に連れてきてくれたり、私達を困らせる事も言うようにもなりました。

隠れて仲間と悪さをしたり、お互いに教えたり教えられたりするギャングエイジの真最中であるA君を見ていると、子どもは友達同士で発達し続け、成長していくという事を改めて感じ

ました。少しずつ少しずつ、仲間関係を育ててきたAくん。今はどこから見てもそこらへんにいるやんちゃな子どもです。

児童館だからこそできる支援

児童館は無料で使える施設です。0歳～18歳までの子どものみならず保護者や地域の支援もできます。Aくんは不登校でありながらも、自分の家の近くに無料で、しかも一人でもはいる児童館がある事で、自由に来館し社会性を取り戻す事ができたのだと思います。そしてそこにはAくんの大好きなゲンペイという「遊び」があった事がなによりも大切だったと思います。楽しいからこそ「遊び」には工夫が必要です。「遊び」で育まれる人と関わる力は、これから未来を生きていくAくんや、すべての子ども達にとって大切な生きる力となると思います。

人と関わる事が苦手だったお母さんも、親の会やペアレントトレーニングに参加し、同じ立場の親同士での相談や悩みを話しながら元気を取り戻し、気づくことが多くあったのではないかと思います。そして、その相互作用としてお母さんの心の安定がAくんに安心を与えてくれました。

児童館は、課題があればそれを解決するための事業をすぐに展開できる、自由性が高い施設であると思います。「親の会」はそんな自由性から生まれ、地域でともに生きる保護者同士をエンパワメントしています。

親の会の活動

親の会の中から、「私は当事者です」という保護者が「成人発達障がいの会」を作り、毎月1回児童館で悩みの共有や情報交換をしています。生きづらさや人との関わりに悩む方、子どもが成人してからもひきこもっていて悩んでいる保護者などが、同じ悩みを抱えた方の話を聴いたり、情報を得たりしながら市町村をまたいで参加しています。

また、親の会は、5年前から始まった障がい児フェスタ「にこキッズフェスタ」で寄付金を

集め、うちわ1,000枚を配布しました。うちわには「障がいを理解してください、決してしつけや育て方、環境などが原因ではありません。また、本人の怠慢でもありません」と、理解と啓発をよびかける、親の思いが書かれていました。そして、その寄付金をもとに2017年の5月に『みんなの学校が教えてくれたこと』（注 小学館 2015年9月21日 木村泰子）の著者である、木村氏の講演会「～子どもの可能性は無量大～共に育つを応援する地域と学校」を開催しました。親の会は、障がいの子を持つ親に寄り添い、支えになり地域にその理解を広めています。そんな地域に根ざす保護者を支える事ができるのは児童館だからこそではないでしょうか。

遊びでつながる子ども達

佐々木正美先生は、精神分析家であるエリクソンのライフサイクルモデルから、学童期の発達課題は「勤勉性」だと言っています。学童期の子ども達は同世代の仲間と、道具や知識、体験を共有することによって勤勉性を獲得していくといいます。（『エリクソンとの散歩』 子育て協会 1996年5月3日 佐々木正美 p36～40）児童館職員以上に、子ども達が遊びの中で自然にAくんを理解し、受け入れていました。Aくんが児童館へ毎日来ることができたのは、一緒に遊ぶことができる仲間がいたからだと思います。この事例を通して、改めて子ども達にとって「遊び」が仲間とのつながりを作り、その中でお互いに成長していく姿を見ることができました。子どもが学校に居場所がないと感じた時、学校以外に子ども同士がつながる場として児童館があることは重要だと思います。

児童館と家庭・学校・地域の連携

職員間で、Aくんを特別扱いするのではなく、1人の個性豊かな子どもとして関わり、Aくんへの関わり方や対応などの話を共有しあいながら支援をしていく中で、「ここはいいね」といつてくれたAくんの言葉や、Aくんが遠足に行け

た事、学校に行けた事などを喜びあいながら支援をすることができた事や、学校とのつながりができた事、そしてなによりお母さんが、困ったときには相談に来てくれ、私達からも相談しながら、Aくんが仲間と遊ぶ場を作るために、児童館へ行く後押しをしてきていました。そして、障がいの子を持つ親の会が、お母さんを支える役割を担ってくれました。児童館だけではなくいろんな場所がつながったからこそできた支援だと思います。

平成23年3月に厚生労働省が児童館ガイドラインを発表しました。そこには、保護者の子育ての支援、配慮を必要とする子どもの支援等も児童館の役割であると、その機能を明確にしています。児童館から家庭・学校・地域とつながり、子どもだけでなく地域の居場所として児童館が果たす役割は大きいと思います。誰もがほっとでき元気になれる児童館を目指し、地域の課題に取り組んでいきたいと思っています。